

大島研三先生を偲んで

第6代日本腎臓学会理事長，杏林大学学長
長澤俊彦

日本腎臓学会の生みの親であり，初代理事長を19年の長きにわたり務められ，第二次世界大戦後の日本の腎臓学を復興させ，そして発展させた大島研三先生は，2008年(平成20年)4月1日に100歳の長寿を全うされ他界されました。

先生は1907年(明治40年)名古屋市で生誕され，秀才の誉れ高く，愛知一中，第八高等学校を経て東京帝国大学医学部に進まれ，1931年(昭和6年)に同大学を卒業されました。直ちに同大学医学部呉内科教室に入局され，呉教授ご専門の神経・筋疾患の成因に関する研究の一環である筋ジストロフィー発症の実験的研究に励まれ，1938年(昭和13年)に医学博士の称号を授与されました。かねてから高血圧と腎臓の関係に興味を持たれていた先生は，Goldblattが1934年(昭和9年)に発表した腎動脈狭窄による実験的高血圧に着目されて，戦時中もウサギを用いて高血圧の実験を一人で続けられました。1943年(昭和18年)には東京帝国大学医学部講師に昇任され，1945年(昭和20年)8月の終戦を迎えられました。戦後間もなくのわが国の二大腎臓病は，若年者の活動性の腎結核と重症(悪性)高血圧でした。前者は抗結核薬が出るまでは腎摘を必要とし，後者は降圧薬が出るまでは脳出血を主とする血管病により死亡する例が多いという悲惨な状態が続きました。1945年，米国のHomer Smithは腎クリアランス法を発表しましたが，先生は1951年(昭和26年)に呉内科後継の東京大学美甘内科で，高血圧に関心の深い金子好宏先生とともに，わが国で初めて腎クリアランス法を用いた健康成人の腎血流量と糸球体濾過量を発表されました(日本臨牀第9巻第7号—医学の進歩)。4年後の1955年(昭和30年)に新潟大学内科の木下康民先生らはIversen & Brunが1951年に考案した経皮的腎生検法を導入して，腎炎の組織学的研究を開始されました。この2つの腎臓の機能と形態の臨床的研究の開始が，わが国における腎臓病の研究を刺激・活性化させ，腎臓病の若手研究者が増えると同時に日本腎臓学会設立の大きな原動力となりました。

大島先生は1953年(昭和28年)46歳のときに，日本大学医学部第二内科教授になられ，東京大学より日本大学に移られました。直ちに電解質研究班，腎機能研究班，腎組織研究班などの研究グループを組織されて腎臓病の多角的研究に着手されました。これは，わが国の内科教室で研究を推進するうえでの斬新な試みで，のちに日本大学第二内科から多くの腎臓病の研究者が輩出した源泉となりました。1950年代も後半になると，わが国の学問の復興も進み，古くからある大きな学会から専門学会が分化する傾向が進みました。内科的腎臓病に関する研究を発表する場は内科学会から循環器学会へと移りましたが，腎臓病は循環器疾患の主流ではなく，総会3日目の午後に発表が割り当てられるという状態でした。これを憂慮された大島研三，浅野誠一，吉利和，上田泰の4人の腎臓内科学を標榜される先生方は，利尿薬サイアザイドの国際会議が1956年(昭和31年)香港で開催された際，腎臓病専門の学会を作ることを語り合われて，3年間の準備期間を経て1959年(昭和34年)に日本腎臓学会を設立されました。腎臓病学会ではなく腎臓学会と命名されたのは，病的な腎臓のみでなく，健康な腎臓の形態と機能も研究する学会という意味からと，伺っています。そして第1回の日本腎臓学会総会(会長 佐々廉平先生)で先生が初代理事長に推挙されました。その後先生は，1965年(昭和40年)に第8回日本腎臓学会会長をなさり，1972年(昭和47

年)には米国の腎臓財団(Kidney Foundation)に相当する腎研究会(現在の腎臓財団)を設立されて、初代理事長となられています。1975年(昭和50年)には日本大学を定年で退官され、日本大学名誉教授になりました。1982年(昭和57年)には先生の数々の学問的業績に対して、勲二等瑞宝章が授与されました。先生のご活躍には退官後も目覚ましいものがあります。その代表的なものが、1990年(平成2年)に東京で開催された第11回国際腎臓学会の会長を務められ、わが国の腎臓学の実力を世界に誇示されたことです。4年後の第12回国際腎臓学会はイスラエルで行われましたが、この学会にも元気に出席されています。

日本腎臓学会では、先生の数々のご功績を永久に称えるために、1997年(平成9年)に学会の褒賞規定を「大島賞と優秀論文賞とする」としました。この年の総会で、第1回の大島賞授与式で大島先生自ら受賞者に賞状を手渡されたことは、記憶に新しいことです。恐らくこの時が腎臓学会にご出席なされた最後ではなかったかと記憶しています。

先生が80歳になられたときの著書「人間の軌道」で、「健康で、情熱を失うことなく高齢になって、突如人の軌道が終わったとき、私はこれを『生命の完遂』と呼びたい」と述べておられますが、先生は自らこれを実行なさり、百歳の長寿を全うされました。

残念ながら先生のご出席はかないませんでした。昨年は日本腎臓学会創立50周年の式典が行われ、会員数も8,000人を超えた節目の年でした。

日本腎臓学会がここまで発展したことは、長年にわたる先生のご指導の賜物と改めて感謝申し上げ、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。